

『近代労使』一九六四年七月・八月（近代労使研究会議）

余暇管理と生活指導

国立教育研究所内容室長 矢口 新

一 余暇の価値

余暇を管理するという考え方は、これまで余り言われなかったことである。余暇というのは、そういうものでないのが余暇なのだという考え方が普通だったからである。だからそこには考え方の上で大きな飛躍があることを知らなければならない。

余暇とは、働く時間でないひまの時間である。ひまがあつたら働けなどということはよくいわれるように、何かそこには働く時間とくらべて価値が低いというように考えられている。この価値は何よりも経済的な価値である。働かなければ食えないから働くのである。その働くというのは、現実には労働を売ることだという経済関係の中で考えられている。「働かざるものは食うべからず」というのは必ずしも、働くということを経済関係においてのみ見ているということではない。

社会に奉仕する、社会に役立つことをすることがなければ社会人の一人として生きて行く資格がないのだということであらわしている。社会の為になる仕事というのは、すべて労働として売ることができるかということとそうではない。労働として売れないことでも、社会に役に立つ仕事をしておれば、社会に生きる資格はある筈である。しかしそれでは実際に生きてゆけないこともある。反対にあまり社会に役に立たないことでも、労働を買ってくれる人があれば生きてゆけるのである。経済というものが横暴な力をもっているのである。

この経済の横暴な力の中で余暇とか労働とかも考えられるのである。労働とは売るのである。金に関係したものである。余暇とはそれから解放された時間のことである。金をもうけるということを非常に重視すれば、その余暇もそのために使うのだということ

になる。余暇はそういうものだから積極的な意義がないわけである。積極的におのれを主張する存在でなく、縁の下の力もちである。ひかげの存在、影武者である。形でなくて地である。だから形の方が強く主張されると、その地がせばめられる。そうでない限りは、どうでもよい。つまり個人個人が勝手に使つてよい。

そういうものに対して、どうしてこれを管理するなどということが考えられるのだろうか。誰が管理するにしても、自分以外のもの手がそれに対してコントロールすることとが考えられるのはおかしいことである。第一、自分がそれをコントロールすることなどは考えないのである。労働との関係でどうでも左右されるのである。労働がはげしくて疲れると、余暇はゴロゴロして過ごす、労働時間がたりなければ、そちらへ廻す、とにかく労働まかせの時間である。自分自身がそうなのだから、他人がそれを管理するとは夢にも考えられないといってよい。

余暇をコントロールするという考え方が起るには、余暇をそれ自身価値あるもの、独自の意義をもつものとして認めて来ることがなければならぬ。現代、余暇の価値が認められるに至った大きい原因は、それをいわゆるレクリエーションに使うことが流行し

出したからである。レクリエーションというよりむしろ日本語で、たのしみとか遊びとか、娯楽とか言った方がよい。とにかくそういうことにひまを使うという雰囲気が出て来た。これは戦後の影響である。労働時間の規約といったものが大きな功績をあげたと言つてよい。これも余暇の価値が認められたことと言つてよい。こうして余暇がそれ自身の存在を主張する雰囲気が出て来た。二つのものがそれぞれを主張すると、そこに新しい統一する原理が必要になつて来る筈である。そういうものがなければ、分裂することになるであろう。

二 余暇のコントロールとコントロール

いわゆるレジャーブームというのは、レジャーをはでに使う使い方が目につく所から出て来たことばである。積極的に堂々とみんなが使い出したのである。遠慮なく使い出した。暇があつたら働けなんてことに遠慮する必要がなくなつたのである。それは時代というものである。理くつを言えば個人の権利が認められたということかも知れない。

しかし労働時間にはそれを使う原理がある。長い間の経験から、その時間をどう使うかという知恵をもっている。所が余暇についてはその経験がないのである。極めて乱雑な

使い方がされる。それはこれまで全く個人のものである。社会的なあり方をしていくわけではない。みんなでどうするかというようなことを考える性質のものではなかった。そこでみんながこれを勝手に使い出すとどうしても、使い方がみだれることが目につくことになる。社会的な現象として乱雑が見られると、どうしてもコントロールというものが考えられて来なくてはならぬ。余暇時間というものが合理的に適切に使用されることが要望されるし、労働時間との関係から、それに対して統制の要望が出て来る。社会的な生活の運営のバランスがくずれて来るから、全体として構造をどうするかということが問題になつて来る。

こうして個人的にも、社会的にも、余暇というものについて、その運営について、新しい考え方が起つて来る。余暇の管理とか使い方とかという問題が起つて来たのは、余暇がそれ自身の存在を強く主張していることである。だがこれをコントロールするということ必然性はその中から出て来ることはない。余暇をコントロールするのは、より広い立場である。労働をコントロールする原理も労働の中から出て来たのでなく、人間的立場、社会的立場から生まれて来ているのである。余暇をコントロールする立場も、社会的、人間的立

場である。つまり社会生活、人間生活の立場から、労働と余暇とをコントロールする原理が出て来るのである。

だから余暇を管理するという考え方は、ただ余暇を管理するのではない。労働を管理するのは、労働を社会的に価値あるものとし、あらゆる人間の権利でもあり義務でもあるために行うのである。余暇を管理するというのも従来の銘々が勝手に使用する余暇を誰かがコントロールするのではなく、人間的、合理的なあり方たらしめるために、条件をつかつて行くのである。生活を正しい生活たらしめるための条件整備ということであろう。

だから余暇管理などという言葉は或る意味で矛盾だとも言えるわけである。私的な生活を他から管理するということはあり得ないということである。しかし余暇が人間的、合理的に使用されて、社会的に混乱を生じないように条件整備をすることは行なわれなくてはならぬ。そのためには、個人個人が自主的に自己の余暇をコントロールすることができなくてはならぬ。そこに余暇管理ということの基本的な方向があるといわなくてはならぬ。実は、余暇に対する社会的条件整備の問題と個々人の自己の余暇に対する合理的コントロールの問題であるというのが

正しいであろう。

ここに一つは社会の側からの条件整備の問題が出て来る。もう一つは教育の問題が出て来る。それは言いかえれば生活指導の問題だということが出来よう。

三 生活指導と「ジョブ」

生活全体のバランスから言うと、現在労働ないしはそれをめぐる条件整備はかなり進んで来たといえよう。それは労働条件をよくすることが経済的に有利でもあることと結びついている。所が、余暇がその存在を主張し出すと、それがそのままでは設置され得なくなつて来る。しかしそれはただ経済の問題としてあるのではなく、もっと広い社会的な問題なのである。

余暇は単なる余りではなく、人間を人間たらしめる生活全体のベター・ハーフなのである。社会人のサービスが労働であるならば、個人の充実が余暇なのであって、どちらが欠けても社会的人間の存在ではない。

個人の充実をはかるために社会が行なっている条件整備は学校教育が最も大きいものである。我国の教育に関する努力は諸外国に比しても決して劣っていない。けれども人間の充実をはかるためのその他の努力については残念ながら極めて貧困である。これは

学校を卒業すると人間的な修養はすべて終わったと考えるという日本人の考え方も関連がある。職業をもって社会人となると、もう勉強ということは考えないのが日本人である。生活の中でそれを修練するという考え方は強くない。日本人は、道を求めるという伝統的な観念をもっているが、それは、茶道とか、花道とかやはり特殊な芸道との結びつきにおいて存在している。近代において発展した様々の生活の中では、人間としての道を修めることは考えていないのである。仕事はただ仕事であるという割り切り方をしていく。とくに明治以後に入つて来た近代産業については、その中で働きそれをみがいて来た伝統がないためにやはり仕事としてのみしか考えない。こうして職業を中心にした生活が荒廃して来たのである。

最近学校教育においても生活指導ということが重視されている。それは戦後言われ出したことで、僅かに十五年にしかならないといつてよい。そしてかなりやかましく言われているに比して依然としてふるわない。或は確かな地位を確保していると言えない。例えば中学校や高等学校で、一年、二年の間は学校の自治活動やクラブ活動に参加するが、三年生になると受験のために脱退するというのは多くの学校で公認されていることであ

る。或はいい成績をとるためには、なるだけそういった社会的な活動はいいかげんにして、個人的な勉強をした方がよいと考えている。これらはいかに人々が社会の生活の中で自分を修練して行くということについて無関心であるかということ物語っている。本当は学校のクラブ活動や自治活動の方が人生にとって意義があるのであり、社会的にも重要なのであるが、個人的な知識の習得のみが教育と考えている。学校で与えられた知識などというものは、実は殆んど忘れてしまうことなのである。専門家になったら専門の事だけ知っているが、他の学校時代の勉強は殆んど忘れていくことは誰もが経験している事である。早い話が中学校や、高校の先生がそうである。彼等は自分の専門のことを除いては、生徒と一緒に試験を受けたら、恐らく三十点以下の点しかとれないだろう。それでも彼等は学校時代には相当な成績をとつていたのである。こう考えると、今人々がためになると思つてやっていることは大したことはないのである。もっと大切なことがある筈である。それは生活の中で生活の正しいあり方を身につけることである。これが生活指導であるが、それが今の日本ではあまり重視されないという困った状況にある。

このような考え方だから、職業生活に入っ

たものの生活を条件整備して、生活の中で修練がなされ、充実した人生をおくり、人間としての存在意義を発揮せしめるといようなことは殆んど考えられて来なかったのは当然である。そういうことでは、実は仕事の方もうまくゆかないということが分つて来ないのである。つまりバランスのとれた生活が存在しない所に、全体的としてよい生活が生まれる筈がない。政治貧困もそこから生まれる。経済の二重構造もそこから生まれる。技術水準の低さもそこから生まれる。労働の不安定もそこから生まれるのである。個人としても、社会としてもバランスのとれた生活のために改めて考え直す時が来ているのである。こういう考え方で余暇問題も取扱われなければならない。

四 余暇利用運動といふこと

レジャーブームの声は余暇が専ら娯楽、たのしみ、無駄さわぎに結びついている所から起つていられるが、それに応じて様々な社会的施設も設けられて来る傾向にある。現在の雰囲気では、それらの施設にも指導性があるとは言えないのが実情である。それらを利用する側にも指導性を嫌う傾向がある。

こういう泰平ムードがいつまでも続く筈がないことは確かである。この泰平ムードの

上にあぐらをかいて、緊張味を失った生活をして居れば、やがてバランスがくずれることはあたりまえである。その点に目をつけている人もいないではない。それが健全娯楽といふようなことであろうし、青少年の健全育成といふような声となつて来るのであろう。

しかし健全な生活の発展は、昔流にかたくらしい生活をするにはあるまい。余暇をやめて仕事をするといふようなことであるまい。余暇を人生にとつてどれだけ積極的な意義を果すものとしてつくりあげるかといふことであろう。それを個人にとつても、社会にとつても発展的な意義を果すものたらしめることが必要なのである。それは結局すべての人々の協同といふことによつてしか実現しないことだとも言える。そこに余暇利用の運動といふようなことが起つて来る必要があるのではないか。

たとえば日本でも最近ユースホステルの如きものが数多く生まれたが、ヨーロッパ特にドイツ当りのユースホステルは、素晴らしく立派である。そこへは多く青少年が宿泊するけれども、堂々たるその施設は一流のホテルなみである。一見ぜいたくだと思つて程であるがそれを利用する青少年は、それを利用することによつて、国民としての高い教養を身につけようとしているのである。生活の態度か

ら習慣から最も高いものを身につけようとするのである。日本では公共施設を大衆が利用したら荒れ果てることは常識だといつてよいが、それではお話にならない。立派な公共施設を荒れ果てさせない大衆をつくることが大切であろう。

以上は一つの例であるが、大衆が高いレベルの生活雰囲気、つまり文化的な合理的な生活をもつことが余暇の善き利用であり、その利用を通じて、高い文化と合理性を体得することにならなければならぬ。それは言い換えれば生活指導といふことである。そして生活指導とは、生活するものが、協同して生活の中で自ら生活をつくりあげるという活動を通じてなされるべきものである。生活とはそういうのみ身につくものである。余暇を管理するといふことがあるとすれば、それは、そういう生活指導の条件を整備することをおいてはならないであろう。